

第5章 被災者の記録から読みとく被災実態

第1節 埋もれていた「被災者実態調査」から

1 宮村攝三と埋もれていた被災地調査

まずは、福井地震で被災者への郵送調査を行った宮村攝三（みやむら せつみ）について紹介をする。宮村攝三は、1915（大正4）年生まれ～2007（平成19）年逝去、1939（昭和14）年東京帝国大学理学部地震学科卒業、元東京大学地震研究所教授。助教授時代の1948（昭和23）年に福井地震が発生した。

宮村とのコンタクトは、中村操（歴史地震研究家、株式会社防災情報サービス）からの紹介によって実現した。そもそものきっかけは、1945（昭和20）年三河地震の調査を行っていた筆者と当時の同僚だった林能成（静岡大学防災総合センター）に、中村から「当時、東大地震研の助手だった宮村攝三先生が1945（昭和20）年三河地震の現地調査をしていて、写真のコピーを預かっている」という情報提供があったことである。

写真はほとんどすべてが未公開、かつ戦時報道管制下に撮影された貴重な資料であり、写真の使用許可を得るために2005（平成17）年に宮村に会ったところ、宮村が長い間手元に保管していた写真自体を譲り受けることとなった。写真の希少性については被災地の地元紙である中日新聞が1面記事として取り上げ（図5-1）、写真箇所の特設調査については、中央防災会議・災害教訓の継承に関する専門調査会『1944 東南海・1945 三河地震報告書』（2007年3月）において林によって紹介された。



図5-1 掲載された宮村被災調査写真
出典：中日新聞、2005年11月12日、夕刊1面
（中日新聞社許諾済）

さて、宮村に会ったときに「他にも地震について現地調査した写真や資料がある。戦争中・戦後すぐのことだったので、段ボールに入れたまま自分も忘れていた。よかったらまとめて譲るので中身を精査してほしい。特に、1948（昭和 23）年福井地震で通信調査（被災者への質問紙調査）を行ったのだが、戦後の混乱期の中で調査をただけになっていて分析も発表もしていない。」と頼まれた。そして送られてきた段ボール箱の中に、1948（昭和 23）年福井地震における「福井県坂井郡金津町の震災調査資料」の回収済み質問紙の原票の束が入っていた。

福井地震については、宮村の著書『回想の地震学人生』（宮村,1991）の中でも「通信調査を福井地方に多い本願寺系の寺を通じておこなったり、短期間現地の視察もしたが、大した成果をあげることではできなかった」とだけ書かれてあり、一般住民への通信調査については触れられていない。まさに「埋もれていた」調査であった。

2 理学研究者による通信調査

ここで本題の調査に入る前に、なぜ理学の研究者が被災者への通信調査を行う必要があったのかをまとめる。『地震災害』（河角,1973）を見ると、第6章に「通信調査」という章があり、地震学の研究者である佐藤泰夫によって執筆されている。それによると「大地震ともなればその影響範囲も広く、完全な実地踏査は困難であり、そのため補助的手段として通信調査（質問状を発送し、これに対する回答を整理して行う調査）が古くから行われていた」と書かれており、地震という現象を総合的に理解するための補助的手段として被災者への質問紙調査がしばしば行われていたようである。

また、この書籍が出版された 1973（昭和 48）年時点において「近頃は、単なる補助的手段以上の積極的意味を持つ。機械観測の持つ能力と限界が次第に明らかになり、地震計をかなり多く設置しても、なお日本のような人口の密な所では、人体感覚その他多数の人による報告に及ばない。また、地鳴りの音色のごときはよほど特殊の観測をするのでなければ、現在のところ、到底人間の感覚に及ばない」とあり、震度推定やその他の現象について、通信調査は積極的な調査手法としてとられていた。

被災者への社会調査は、基本的には社会学者によって「被災者の主観的評価による心理・行動、社会現象の解明」を目的として行われるものであるが、このように自然科学者によって「自然現象解明のために一般市民の叡智を結集する」目的で行われることもあったのは、観測機器や推定手法の高度化によって「データとパソコンさえあればすべて解明できる」現在の地震学研究とは違いたいへん興味深いものである。

3 通信調査の実施

福井県坂井郡金津町の震災調査は、震災から 4 ヶ月半が経過した 11 月に行われ、211 世帯か

ら回収された。金津町は全壊 845 戸、半壊 81 戸、焼失 304 戸であり、焼失戸数でいうと福井市 (2,609 戸)、丸岡町 (1,176 戸) に次ぐ被災地であった (福井県,1949)。対象者選定は、ランダムサンプリングによるものであり、調査票の訪問配布・郵送回収で行われた。この意味で、社会調査としては当時の状況を勘案しても、一般性・普遍性の高い有意義な調査であると評価できる。また、資料の中には、調査票の訪問配布時に不在だった世帯に添付する「お願い文」(文案?)が見つかった(図5-2)。このように手間暇をかけて誠意をもった調査が行われており、総合的に地震現象を解明しようとする意志と熱意を感じることができる。

<お願い文>

このたび福井縣金津町において、さる六月二十八日の震災時における状況の調査をおこないました。調査世帯は配給台帳よりまったく任意にえらびました。あなたのところがあたりましたが、御不在でありますので書面によりおといあわせいたします。一例でもかけては学問的に調査の意義がうしなわれますので、なにとぞ各項全部もれなく御記入のうえ、至急御返送ください。家屋については、震災当時居住せる住家について、あてはまるところに○印を、人員については世帯員および来客についての状況を書いてください。当時よそにゐたものについては、そのむねを備考欄にかいておいてください。 右、おねがいまで。

十一月十日

東京大学地震研究所 宮村攝三

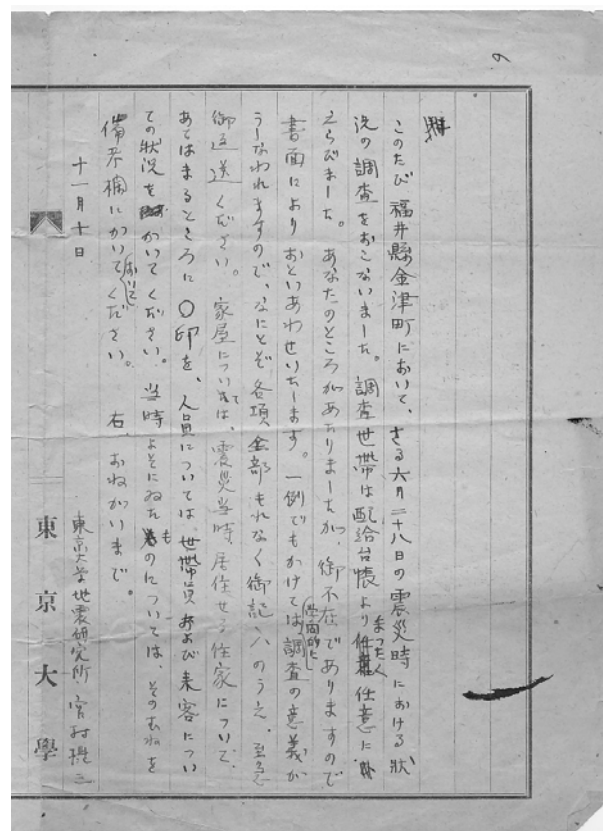


図5-2 調査票の訪問配布時に不在だった世帯へのお願い文

4 調査票について

調査票については、表型式の一枚ものの調査票に、住所と家屋の状況、震災時に家にいた世帯員・来客についてそれぞれの状況を記入させるものであった（図5-3）。質問項目は以下のとおりである。

■住所と家屋の状況

- 1) 住所（番地まで記入）
- 2) 家屋竣工年（約〇年前）
- 3) 坪数（〇坪）
- 4) 屋根の形態（〇ブキ）
- 5) 家屋の型式1（農家、商店、住宅から選択）
- 6) 家屋の型式2（二階、平屋から選択）
- 7) 家屋被害程度（全潰（完全につぶれた、つぶれず）、半潰、破損（小、中、大）、無被害、全焼、半焼から選択）

■各人の状況（それぞれについて記入）

- 8) 性別
- 9) 年齢
- 10) 体調（健康、病気、不具から選択）
- 11) 地震時の場所と行動（屋外、屋内にいて屋外に逃げた、屋内にいて屋外に逃げられなかった、逃げなかったから選択）
- 12) 死亡状況1（即死、救出後〇時間死亡、重傷後〇日死亡）
- 13) 死亡状況2（圧死、焼死、出血死、直接原因（〇〇））
- 14) 負傷状況1（重傷、軽傷、傷名（〇〇））
- 15) 負傷状況2（直接原因（〇〇））
- 16) 備考

なお、調査票の下には以下の文章が書かれてあった。

コノ震災ヲ今後ノ対策ニ生カスタメ調査ニ御協力下サイ
該当スルトコロニ〇印ヲツケ、又適当ナ記入ヲシテ下サイ
死亡者ニツイテモワカルダケノコトヲ御記入下サイ

東京大学地震研究所

年齢	性別	健康状態	被害程度	死亡原因	備考
坂井 市 津 町 大字 六日区 小字 [] 番地 備考欄 家屋竣工の25年経、坪数21坪、屋根瓦葺、埋式濃灰筋、住宅、三階床家 被害程度(全潰=ツラシ、完全=ツラシメ)、半潰破損、無被害、全潰、半潰					
70才	男	健康	1屋外=平①、屋内=平 テテテテテテテテテテ =テテテテテテテテテテ カッタ。逃テテテテテ	死 即死、救去後、時間死亡、重傷後 圧死、焼死、出血死... 直接原因; 重傷、軽傷、傷名 直接原因	晩亡
41才	女	健康	1屋外=平②、2屋内=平 テテテテテテテテテテ =テテテテテテテテテテ カッタ。逃テテテテテ	死 即死、救去後、時間死亡、重傷後 圧死、焼死、出血死... 直接原因; 重傷、軽傷、傷名 直接原因	晩亡
35才	男	健康	1屋外=平①、2屋内=平 テテテテテテテテテテ =テテテテテテテテテテ カッタ。逃テテテテテ	死 即死、救去後、時間死亡、重傷後 圧死、焼死、出血死... 直接原因; 重傷、軽傷、傷名 直接原因	晩亡
15才	女	健康	1屋外=平①、2屋内=平 テテテテテテテテテテ =テテテテテテテテテテ カッタ。逃テテテテテ	死 即死、救去後、時間死亡、重傷後 圧死、焼死、出血死... 直接原因; 重傷、軽傷、傷名、 <u>足小指血官</u> 直接原因; 又物落下切斷	晩亡
5才	女	健康	1屋外=平①、2屋内=平 テテテテテテテテテテ =テテテテテテテテテテ カッタ。(逃テテテテテ)	死 即死、救去後、時間死亡、重傷後 圧死、焼死、出血死... 直接原因; 重傷、軽傷、傷名 直接原因	階下に 幕ついた
2才	男	健康	1屋外=平①、2屋内=平 テテテテテテテテテテ =テテテテテテテテテテ カッタ。(逃テテテテテ)	死 即死、救去後、時間死亡、重傷後 圧死、焼死、出血死... 直接原因; 重傷、軽傷、傷名 直接原因	母が だめだった
才	女	健康	1屋外=平①、2屋内=平 テテテテテテテテテテ =テテテテテテテテテテ カッタ。逃テテテテテ	死 即死、救去後、時間死亡、重傷後 圧死、焼死、出血死... 直接原因; 重傷、軽傷、傷名 直接原因	

コノ震災ヲ今後ノ対策ニ生カヌタ 調査ニ御協力下サイ。
 該当スルトコロニ○印ヲシテ又適当ニ記入ヲ下テ
 死亡者ニツイテモワカレタケノコヲ印記入下サイ。

東京大学 地震研究所

図5-3 実際に回収された調査票

(報告書掲載にあたり住所の一部を塗りつぶして加工した)

5 データ化作業

回収された全 211 世帯の調査票をエクセルに入力した（表 5-1）。「人員」単位で入力したところ、全部で 211 件の世帯のデータ、867 人分の人員のデータを本調査は収集することができたことがわかった。

表 5-1 エクセルに入力されたデータ

（報告書掲載にあたり氏名・住所の一部を塗りつぶして加工した）

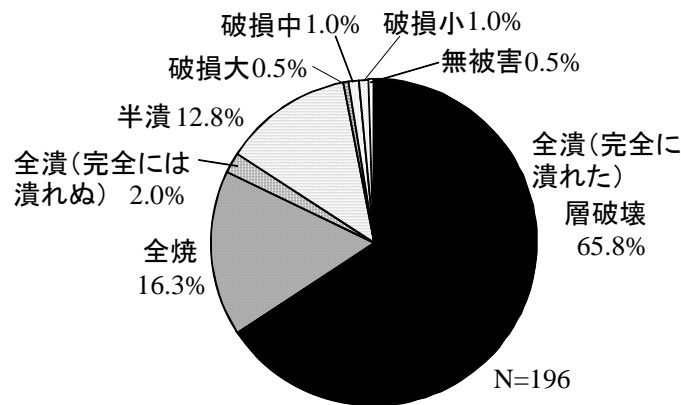
ID	名前	住所1	住所2	住所3	住所4	家屋竣工年	家屋竣工日	坪数	屋根	型式1	型式2	被害程度	火災	備考	性別	年齢	家族/身体	被害時	死亡	
001		福井県坂井郡	金津町	下八日		50		15	1	3	1	4	0		1	49	1	1	2	0
001		福井県坂井郡	金津町	下八日		50		15	1	3	1	4	0		2	51	1	1	2	0
001		福井県坂井郡	金津町	下八日		50		15	1	3	1	4	0		2	18	1	1	2	0
001		福井県坂井郡	金津町	下八日		50		15	1	3	1	4	0		2	15	1	1	2	0
001		福井県坂井郡	金津町	下八日		50		15	1	3	1	4	0		1	14	1	1	1	0
002		福井県坂井郡	金津町	下八日		30		25	1	2	1	6	0		1	37	1	1	2	0
002		福井県坂井郡	金津町	下八日		30		25	1	2	1	6	0		2	28	1	1	2	0
002		福井県坂井郡	金津町	下八日		30		25	1	2	1	6	0		1	1	1	1	2	0
003		福井県坂井郡	金津町	下八日		10		45	1	3	1	6	0		1	43	1	1		0
003		福井県坂井郡	金津町	下八日		10		45	1	3	1	6	0		2	44	1	1		0
004		福井県坂井郡	金津町	下八日		30		15	1	3	1	6	0		1	50	1	1	4	0
004		福井県坂井郡	金津町	下八日		30		15	1	3	1	6	0		2	49	1	1	1	0
004		福井県坂井郡	金津町	下八日		30		15	1	3	1	6	0		2	19	1	1	2	0
004		福井県坂井郡	金津町	下八日		30		15	1	3	1	6	0		2	17	1	1	4	0
004		福井県坂井郡	金津町	下八日		30		15	1	3	1	6	0		1	13	1	1	2	0
005		福井県坂井郡	金津町	下八日		70		15	1	3	1	6	0		2	64	1	1	4	0
005		福井県坂井郡	金津町	下八日		70		15	1	3	1	6	0		2	20	1	1	4	0
006		福井県坂井郡	金津町	下八日		80		15	1	3	1	6	0		1	32	1	1	1	0
006		福井県坂井郡	金津町	下八日		80		15	1	3	1	6	0		2	31	1	1	3	0
006		福井県坂井郡	金津町	下八日		80		15	1	3	1	6	0		2	7	1	1	1	0
006		福井県坂井郡	金津町	下八日		80		15	1	3	1	6	0		2	6	1	1	3	0
007		福井県坂井郡	金津町	下八日		60		20	1	2	1	6	0		1	52	1	1	2	0
007		福井県坂井郡	金津町	下八日		60		20	1	2	1	6	0		2	60	1	1	2	0
007		福井県坂井郡	金津町	下八日		60		20	1	2	1	6	0		1	21	1	1	1	0
007		福井県坂井郡	金津町	下八日		60		20	1	2	1	6	0		1	16	1	1	1	0
008		福井県坂井郡	金津町	下八日		40		27	1	3	1	6	0		1	74	1	1	3	1
008		福井県坂井郡	金津町	下八日		40		27	1	3	1	6	0		1	48	1	1	3	0
008		福井県坂井郡	金津町	下八日		40		27	1	3	1	6	0		2	42	1	1	2	0
008		福井県坂井郡	金津町	下八日		40		27	1	3	1	6	0		1		1	1	1	0
009		福井県坂井郡	金津町	下八日		300		42	1	2	1	6	0		1	55	1	1	2	0
009		福井県坂井郡	金津町	下八日		300		42	1	2	1	6	0		2	52	1	1	2	0
009		福井県坂井郡	金津町	下八日		300		42	1	2	1	6	0		1	16	1	1	1	0
009		福井県坂井郡	金津町	下八日		300		42	1	2	1	6	0		2	14	1	1	3	0
010		福井県坂井郡	金津町	下八日		50		26	4	2	1	6	0	屋根	1		1			
010		福井県坂井郡	金津町	下八日		50		26	4	2	1	6	0	屋根	2	1	1	1	3	1
010		福井県坂井郡	金津町	下八日		50		26	4	2	1	6	0	屋根	2	26	1	1	3	0
011		福井県坂井郡	金津町	下八日		5		6	3	3	2	4	0	バラツ	1	60	1	2	1	0
011		福井県坂井郡	金津町	下八日		5		6	3	3	2	4	0	バラツ	2	52	1	1	1	0
011		福井県坂井郡	金津町	下八日		5		6	3	3	2	4	0	バラツ	1	23	1	1	1	0
011		福井県坂井郡	金津町	下八日		5		6	3	3	2	4	0	バラツ	2	30	1	1	2	0
011		福井県坂井郡	金津町	下八日		5		6	3	3	2	4	0	バラツ	2	28	1	1	2	0
012		福井県坂井郡	金津町	下八日		20		20	1	1	1	6	0		1	64	1	1	1	0
012		福井県坂井郡	金津町	下八日		20		20	1	1	1	6	0		2	55	1	1	1	0
012		福井県坂井郡	金津町	下八日		20		20	1	1	1	6	0		1	41	1	1	1	0
012		福井県坂井郡	金津町	下八日		20		20	1	1	1	6	0		2	37	1	1	1	0
012		福井県坂井郡	金津町	下八日		20		20	1	1	1	6	0		2	14	1	1	1	0
012		福井県坂井郡	金津町	下八日		20		20	1	1	1	6	0		2	7	1	1	1	0
012		福井県坂井郡	金津町	下八日		20		20	1	1	1	6	0		2	3	1	1	1	0
013		福井県坂井郡	金津町			30		30	1	3	1	6	0		1	60	1	1	2	0
013		福井県坂井郡	金津町			30		30	1	3	1	6	0		2	60	1	1	2	0
013		福井県坂井郡	金津町			30		30	1	3	1	6	0		2	14	1	1	2	0
014		福井県坂井郡	金津町					25	1	3	1	6	0	家屋	1	36	1	1	4	0
014		福井県坂井郡	金津町					25	1	3	1	6	0	家屋	2	72	1	1	3	0
014		福井県坂井郡	金津町					25	1	3	1	6	0	家屋	2	26	1	1	3	0
014		福井県坂井郡	金津町					25	1	3	1	6	0	家屋	1	9	1	1	1	0
014		福井県坂井郡	金津町					25	1	3	1	6	0	家屋	2	7	1	1	3	0
014		福井県坂井郡	金津町					25	1	3	1	6	0	家屋	1	2	1	1	3	0
015		福井県坂井郡	金津町	六日		23		12	1		1	6	0		1	44	1	1	1	0
015		福井県坂井郡	金津町	六日		23		12	1		1	6	0		2	46	1	1	1	0
015		福井県坂井郡	金津町	六日		23		12	1		1	6	0		1	22	1	1	3	0
015		福井県坂井郡	金津町	六日		23		12	1		1	6	0		1	20	1	1	1	0
015		福井県坂井郡	金津町	六日		23		12	1		1	6	0		1	17	1	1	1	0
015		福井県坂井郡	金津町	六日		23		12	1		1	6	0		1	14	1	1	1	0
015		福井県坂井郡	金津町	六日		23		12	1		1	6	0		2	4	1	1	1	0

6 分析結果から見えてきたこと

質問項目が多岐にわたるために、本報告書ではいくつかの焦点をしぼって結果を述べていきたい。

(1) 家屋被害について

まず、家屋被害について見ると(図5-4)、全潰(完全につぶれた)という、いわゆる層破壊が65.8%にもものぼった。ついで全焼が16.3%、半焼12.8%と続いた。なお、全焼(n=32)のうち、31件について「家屋被害は全潰(完全につぶれた)被害である」と回答していたために、実に81.6%の世帯の家が層破壊するような強いゆれに見舞われていたことがわかった。



※全焼(n=32)のうち31件が全潰(完全に潰れた)の上に全焼(残り1件は無回答)

図5-4 家屋被害

次に、どのような家屋で家屋被害が発生したのかを調べた。家屋被害と家屋竣工年数との関係を見ると(図5-5)、家屋竣工年数が10年以下の家では、全潰(完全に潰れた)家屋が64.9%、それ以外が35.1%であり、それ以上の年月が経過している家屋では80~90%近い家屋が層破壊していることを考えると、家屋の新しさが大きな理由であることが考えられる。

また、家屋形式(平屋か二階建てか)で見ると(図5-6)、平屋建ての層破壊家屋が71.7%、二階建ての層破壊家屋が85.7%であった。家屋竣工年数と家屋形式の間に統計的な有意な差が見られないことから、家屋においては二階建ての方が層破壊しやすいことがわかった。

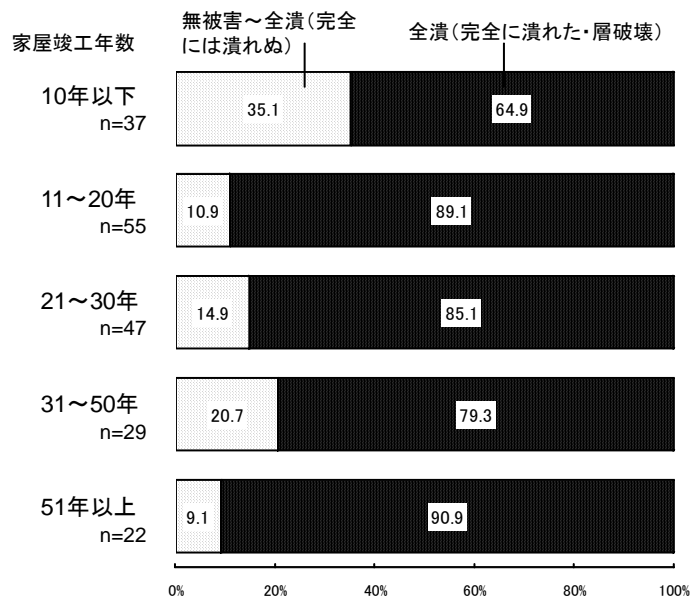


図 5-5 家屋被害と家屋竣工年数の関係

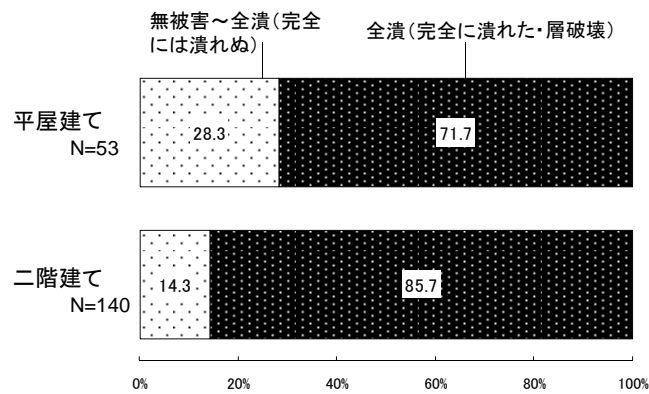


図 5-6 家屋被害と家屋形式の関係

(2) 人的被害について

次に人的被害について見ると(図5-7)、858人中、死亡が3.6%、負傷が9.7%、被害なしが86.7%であった。1995(平成7)年阪神・淡路大震災における神戸市東灘区の死亡率(直接死)が0.7%、神戸市全体で0.26%であることを考えると、東灘区の5倍以上という高い死亡率であることがわかった。

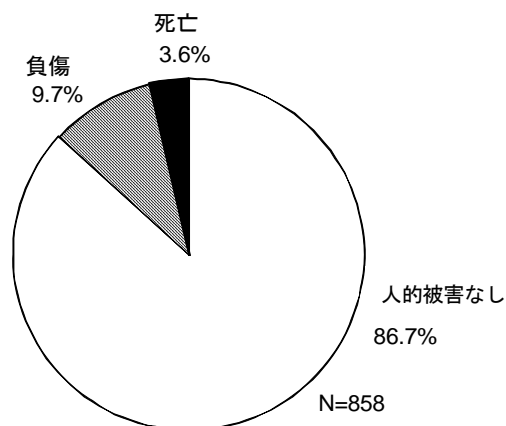


図 5-7 人的被害

次に死亡の原因をさぐるために、家屋被害と人的被害の関係をみると（図5-8）、全潰（完全に潰れた）家屋で死亡率3.3%・負傷率10.5%、全焼家屋で死亡率4.4%・負傷率7.4%という高い率であることがわかった。入浴中に湯銭の状態で圧死した無被害家屋の1人（53歳・女性）を除くと、すべての死者が生存空間ない家屋被害の中で死亡していることがわかった。

死亡原因を見ると、31人中27人が即死・圧死の状態だった。残りの4人は、救出後30分で頭部強打による内出血により死亡（4歳・女性）、救出後20時間で失血による死亡（8歳・女性）、重傷で10日後死亡（62歳・男性）、重傷後死亡（時期不明）（61歳・女性）であった。

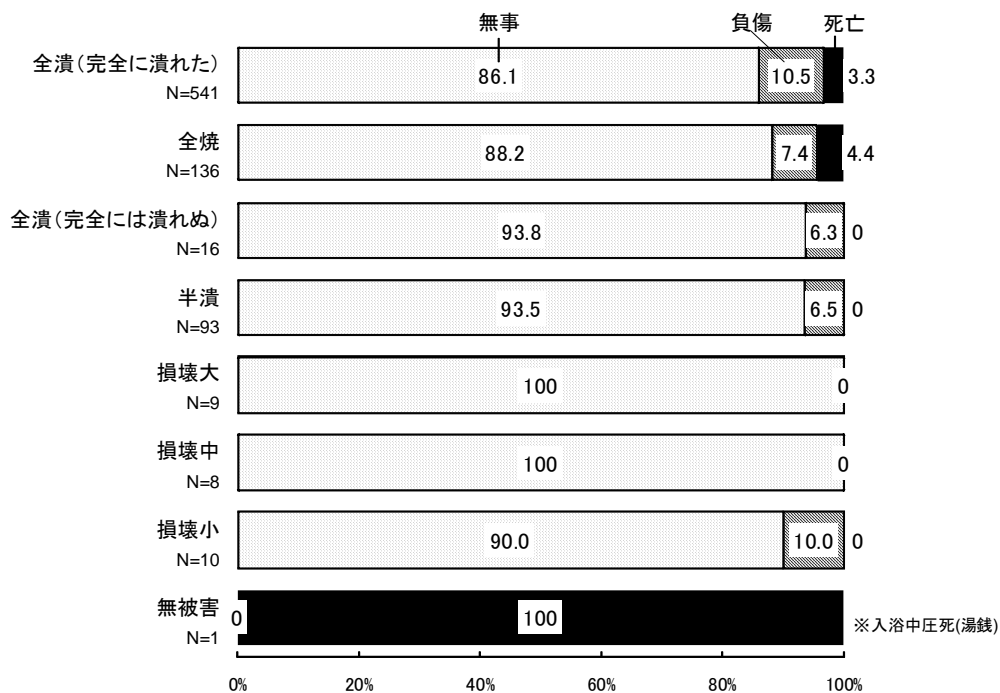


図5-8 家屋被害と人的被害の関係

(3) 地震発生時の行動について

質問紙では地震時の行動について尋ねる項目があった（図5-9）。地震時に屋外にいた人が35.8%、屋内にいて戸外に逃げた人が39.5%、屋内にいて戸外へ逃げられなかった人が19.1%、逃げなかった人が5.7%であった。当時は関東大震災の影響で「地震時には狼狽することなく戸外へ避難する」という指針が伝えられていた（文部省震災予防調査会「地震津浪の避難に関する注意」（大日本雄辯會講談社, 1923））。そのため、約4割の人が地震で揺れる中を急いで戸外へ逃げたことが考えられる。

次に、このような地震後の行動と人的被害の関係について見ると（図5-10）、屋内にいて戸外へ逃げられなかった人では死亡者が15.0%、負傷者が28.8%と高い人的被害割合であった。逃げられずに亡くなった人（2人）を見ると、銀行にて焼死（18歳・男性）、屋外にいたが子どもをつれて屋内に入った（46歳・女性）といった理由であった。また、屋外にいて亡くなっ

た人（3人）は、家の後方がすぐ竹田川で、その石垣に遊んでいたが、それらの石の下になり川で死んだ（10歳・男性）、屋外に遊戯中だったが恐怖の余り屋内に駆け込む中、家屋の下敷になり右顔面を潰裂する（10歳・男性）、圧死（理由不明）（8歳・男性）と子どもに被害が集中していた。屋内にいて屋外へ逃げる中で死亡した人（2人）は、61歳女性と60歳女性がともに逃げ切れずに圧死するかたちで即死していた。

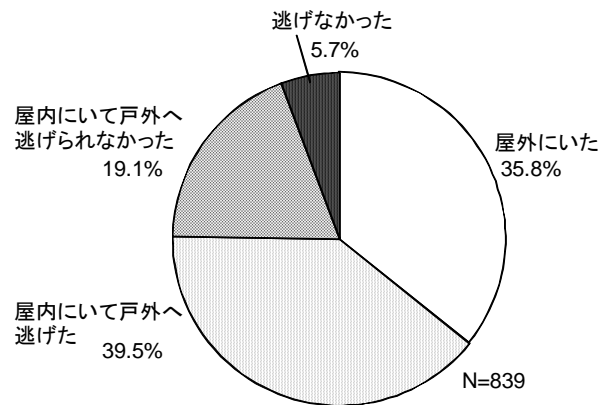


図5-9 地震時の行動

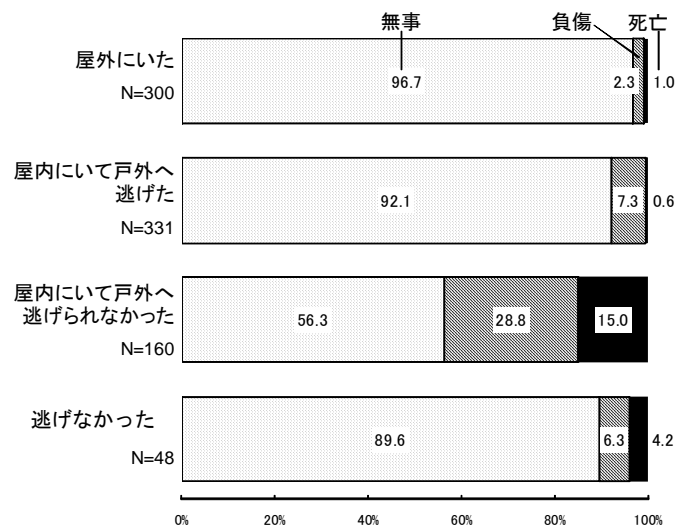


図5-10 地震後の行動と人的被害の関係

7 おわりに

以上、宮村攝三が行った1948福井地震の通信調査（質問紙調査）の背景・意義を述べながら、実際に回収された211票・867人分のデータを入力し、分析を行った。戦後の混乱期であるにもかかわらず、一般性・普遍性の高い科学的な手法に基づく調査を行ったことで、その結果については被災地の実情と地震が人々に与えた影響を考察するに足るものであった。

分析は震災から 60 余年後に行われたが、調査は被災から半年もたたないときに被災地において行われたものである。長き年月をおいた現在においても、当時の被災地の実情をありありと描き出すことができる社会調査の力を実感することとなった。一方で、地震学の研究者が 1 人で行った調査のため、災害後半年までの災害対応や生活再建に関する質問項目がなく、せっかく科学的な手法で実施されたのにもかかわらず、これらの知見を得ることができなかったのはたいへん残念である。

1995（平成 7）年阪神・淡路大震災以降、被災者の生活再建過程を明らかにするような社会調査の実施が行われている。そこでは、被災地を対象に時期をおいて複数回の調査を行うことで、被災地を定点観測し、被災地・被災者実情を明らかにするだけではなく、それらをオンデマンド型の基礎資料として、被災者支援のために役立てていこうとする新たな動きが見られている。この点で、社会調査は更なる進化の可能性を秘めている。

宮村の調査は、本来持っている社会調査の意義・重要性を改めて気づかせてくれるとともに、今後の社会調査の進化の可能性、標準的な調査手法の確立の必要性についても示唆しているといえよう。

第 2 節 福井地震の体験 -地震体験と家族-

地震の悪夢-柴田亮俊氏の福井地震体験聞き取り調査記録

<話し手の柴田亮俊氏のプロフィール>

生年月日：1929（昭和 4）年 10 月 16 日

出身地：越前市（旧武生市）

学歴：1949（昭和 24）年 3 月、福井師範学校本科卒業

職歴：1949（昭和 24）年 4 月から 1990（平成 2）年 3 月まで、
敦賀市内の小中学校に教諭として勤務する。

現在の役職：自然観察指導員・ナチュラリストリーダー

日本植物保護推進会議幹事

敦賀短期大学地域交流センター生涯学習「ふるさとの自然」講師

敦賀市文化財保護審議会委員

（記録者註）

柴田亮俊氏は、福井地震を記録した FTV「座タイムリー福井 昭和の証言 第 15 回福井震災 60 年目の教訓」（2008（平成 20）年 1 月 6 日放映、2009（平成 21）年 12 月 29 日再放送）において地震体験を語っている。また、「地震の悪夢—52 年振りに書いた体験記録—」（財団法人福井県教職員互助会『退互ふくい』第 6 号 平成 12 年 9 月 10 日発行 p.8）に体験記を載せている。この記録は、それらの過去の柴田さんの地震体験記録をベースに、改めて 2010（平



柴田亮俊氏
（2010 年 1 月撮影）

成 22) 年 1 月 16 日に記録者が敦賀市松葉町のご自宅を訪問して面接記録し、記録記述の内容を確認していただいたものである。

1 地震との遭遇

昨年から今年にかけて、敦賀に地鳴りをともなったかなり強い地震があった。その度に福井地震の悪夢が甦る。

当時、私は福井師範学校の学生だった。戦災後、鯖江の元陸軍歩兵 36 連隊兵舎を仮校舎として使用していたので、越前市（旧武生市）の味真野にあった生家（法雲寺）から通学していた。

地震は福井県嶺北地方の丸岡付近を震源とし、1948（昭和 23）年 6 月 28 日午後 5 時 14 分に発生した。地震に遭遇した場所は、福武線から南越線の電車に乗り換えて、五分市駅で下車して徒歩で帰宅する途中で、20 分くらい歩いて家まで 3 キロ程の現在の越前市「越前の里」近くにある余川集落の手前にさしかかった時だった。その日はどんよりと曇り、蒸し暑く何となく不気味さを感じる日だった。

突然、空が割れるようなゴォーといういくつもの雷が落ちたような轟音とともに、未だかつて経験した事がない恐怖と揺れを感じた。まだ舗装されていなかった道路は、縦横左右に無数のひび割れが起こり、ブカブカと割れ目が開閉していた。折悪しく通りかかった荷車が道路脇の田に転がり落ちた。田圃は成長盛りの稲が植わったまま大きく波打っていた。地震直前に渡った鞍谷川にかかる寿保院橋のコンクリート製の欄干が音を立てて折れた。

私は激しい揺れのために道路上を転げ回ったが、地割れに挟まっては大変だと思い路肩の草むらに身を伏せた。震動はかなり長く続いたが、少し弱くなったのでふと顔を上げて余川集落の方を眺めて驚いた。地震の震動で家屋の壁土の埃が舞い上がり、一面が煙幕に包まれたようで、全く家並は見えなかった。てっきり家はみな全壊したものと思った。ところが壁土の埃が収まると、家並がくっきりと見えてきた。どの家も潰れていなかったのには驚きと不思議さすら感じた。2 キロ離れたところにある今立町では、下屋が落ちたところや半壊となったところもあったが、弱い家は潰れたが、家はそう簡単には潰れなかったということを実感した。田圃の稲は震動で波打っていた。

私の生家の被害は、竈が倒壊して掘り炬燵の石積みや石垣が崩れ、壁に亀裂が入り傾き本堂も少し傾いたが、被害は軽微だった。しかし、ちょうど夕飯の仕度の時であったので竈の倒壊で火が出たが、家族がいち早く消火したので大事には至らなかった。

2 春江の兄の安否と被災の状況

私の家も家族も無事だとなると、春江の兄のことが心配になった。兄は春江町の大石小学校

に常直で勤めていた。電話も交通機関も不通となり、停電のために電報もとどかなかった。兄の消息が分からないその日の夜は、家族みんなが心配で寝られなかった。やむなく明るく朝、私は自転車に救援物資を積んで、兄の安否を確かめるために春江の兄のもとへ向かった。

どこをどう通っていったかははっきりとは覚えていないが、福井市内を通過して坂井郡の春江に向かった。福井市内の被害は甚大で、ハーモニカビルという愛称のあった7階建ての大和デパートは崩れてまだ煙が出ていた。福井の町で一番悲惨に思ったのは、映画館の松竹座で、ちょうど「愛染かつら」を上映していて超満員だったというが、潰れて火災で燃えてしまっていて、まだ余燼が冷めやらぬのに、母子が弁当箱に黒っぽくなった骨を泣きながら拾っていた無惨な様子を覚えている。映画館の自転車置き場は、倒れて溶けてひとかたまりのようになっていた。本当に地獄のような有様だった。

自転車にいっぱい食料を積んで家を出発したが、九頭竜川の河畔まで行ったら、川を渡る橋がすべて地震で落下して渡れない。臨時に川船が渡しを無料で行っていた。しかし、いっぱいの人で、荷物を積んだ自転車を乗せると重心が悪くなってひっくり返る心配があるということで、後回しになったが1時間以上待たされてやっと川を渡ることができた。

地割れがひどくて大きな道は通れない状況だったので、農道を通っていった。丸岡回りだったと思うが、タンスの引き出しに死体を乗せていた。火葬場へ行っても建物もなくなっていたので、野焼きを家族だけでしていて気の毒だった。

春江の大石小学校にたどり着いたのは夕方だった。二階建ての大石小学校の校舎は一階が潰れていた。用務員らしい人がいたので、「柴田は元気でおりますか？」と尋ねたら、「エー、柴田先生、おつてです。そこら辺に」という返事だったので、てっきりこれはだめかと思ったら、兄は無事だった。宿直室が平屋でプラタナスの並木に寄りかかったのが、兄は窓から脱出できたのだった。学校の近所の農協の倉庫が、貯蔵していたマッチが地震でこすられて発火して火災となった。兄は消火の手助けを求められたが、校舎二階には、数人の児童が居残りして絵を描いていたので、「こどもが残っていますので！」とあって消火の手伝いには行かなかった。居残りの生徒は、潰れた一階と二階の天井と床の隙間から自力で這い出してきた無事だった。後で、「よく探して助け出してくれた」とその措置を校長から褒められた。その夜は兄と校庭に理科室から見つけてきた運動会用のテントを張り、進駐軍の払い下げの90ボルトのバッテリーに、割れていない白熱灯をテントに下げて、理科室にあった蓄音機に無事だったレコードをかけた。そうしたら学校にだけ電気が灯り、音楽が聞こえてくるので「ラジオが鳴っているぞ」と、近所の人たちが学校は無事だったと思い違いをして集まってきた。

兄の無事は確認したものの、電話も通じない、電報も打てない、とにかく情報手段が全くなく、家の者に安否を知らせる事ができないので、よく早朝に春江から歩いて味真野の実家に向かった。二日ほど家で休養をとると、今度は春江の随応寺というところにある親戚の最勝寺に救援に向かった。写真にあるように、西勝寺は地震によって全壊だった。

一階が潰れて屋根が乗っている。左の人物が私です。震源地近くでは、家が一回転したり、

いっぺん放り上げられてから他所の敷地へ放り出された。建物が吹っ飛んだ状況だった。おばさんのお腹には赤ん坊がいた。子どもが生まれるまで異常児の出産を心配していっさい子どものことは言わなかった。おばさんは下屋の下敷きになっていて、梁の下になっていて、頭から血がボロボロとしたたっていた。一人では到底梁を持ち上げられないので、近所の人々が助け合って人の力で梁を持ち上げて助けた。被災による胎児への影響を心配したが、無事に女の子が生まれた。その子には 1948（昭和 23）年を忘れないように「文子（ふみこ）」と名付けられた。私と兄は後片付けの手伝いで、二週間程随応寺にいた。余震が続くので畑に御座を敷いて進駐軍のテントを貸してもらい、テント一つに 5～6 家族が入った。共同炊事だったが、救援物資はなかなか来ない、医者はいないなど大変だった。

聞いた話だが、春江では、地震と同事に田圃から水が吹き出し、海底へ吸い込まれるような感じで恐怖を覚えたという。水が吹き出したら今度は砂が大量に吹き出した。液状化現象というものなのでしょう。前は水が出ていた井戸が枯れ、別の所から水が吹き出したりした。地下の水脈が変わったのでしょう。

春江の駅付近は火災で丸焼けだった。炎が迫る中、それまで嫁いびりがひどかった姑が倒壊した家の下敷きとなり、嫁が助けようとする、「あんたは逃げて！まだ先が長いのだから！」と言って突き放した、嫁が「おかあさん！おかあさん！」と泣き叫ぶ様子は哀れだったという。

3 地震後の水害

地震があってから梅雨の季節の 1948（昭和 23）年 7 月 24 日午後から豪雨となった。九頭竜川の堤防が決壊して水害が起きた。堤防が地震で被害を受けていて完全復旧されないままの状態であった。25 日午後 6 時頃から再び豪雨となった。この水害の折、私の居た春江側では、鐘や太鼓が打ち鳴らされて、大勢の人が堤防に乗り、その重みで堤防の決壊を防いだ。そのために九頭竜川左岸の福井市側の堤防が決壊し、当時の福井市総面積の大半の地域が浸水し、半数近くの家が罹災した。



写真 5-1 倒壊した西勝寺—随応寺—
(提供：柴田亮俊氏)

地震災害を経験して感じたことは、とにかく情報がなかった。炊き出しは最初は武生から来た。しかし、どこで入手できるのかわからなかったし、全国では福井県全体が壊滅したと思われるので、四国の親戚から家に救援物資が来た。食料は不思議なもので、被災直後は空腹感を感じなかった。しかし、黒こげになった人が手に持っていた米の包が焼き米となっていたが、合掌してその米をいただいたりもした。あちこちに死体があるとあまり不気味にも感じなくなっていた。下敷きになって火災が迫ったので、挟まれた腕をノコギリで切断して救出したということも聞いた。

2008（昭和 20）年の空襲、僅か3年後の地震に水害と、福井は短期間に大きな災害を相次いで受けた。しかし、福井市はこの災害を機会に他の地方都市よりもいち早く下水道を整備するなど、復興は早く、その象徴として「フェニックス通り」という名が付けられた。復興事業のために土木建設業の分野で大企業が創出されたのもこの地震がもたらした一面だと思う。

4 記録者のコメントーまとめと教訓ー

柴田さんの地震体験から、記録者が感じた点は、まず地震災害の凄まじさである。柴田さんが地震に遭遇した現在越前市の越前の里と丸岡の震源からは、直線で30キロ以上離れている。しかし、「空が割れるような地鳴り」という表現は、「地が割れるとか」、「地が裂ける」、というのが一般的であろうが、「空が割れる」という表現に、これ以上のものはない凄まじさを感じた。また、春江の液状化現象の表現も「海底に引きずり込まれるようだった」と、海際ではなく内陸部の丘陵地帯にある春江町での表現に、恐怖感がただならぬものであったことを受け取ることが出来た。

映画館でのだれともわからぬ子どもの骨を拾う母親と子、迫り来る火災を前に命の短長の判断で嫁を逃がす姑の話からは、限界状況での人としての姿に胸をうたれた。

柴田さんが、電話や鉄道をはじめとする情報交通インフラが途絶した状況で、家族を代表して道もわからぬ中、被災地を自転車や徒歩で春江を兄の安否確認に往復したこと。被災地での親戚の救援や救援先での近所の人々の助け合いに、家族や近所の人々の絆が、被災者の救出と勇気づけに重要なことを知ることが出来た。

また、記録者は嶺南流域圏検討会の委員を長年勤めている。敦賀市の主河川である筥ノ川水系の治水計画を検討する際に、ダム堰堤とすべき箇所がすべて断層上なので治水計画の中でダムを検討することはなかった。その折に、河川堤防の耐震の計数はあるのかという質問をしたが、管理者側からの返答は「ない」ということだった。土盛りの河川堤防は地震に対する対策はないのが現状である。しかし、この福井地震は、地震によって土盛りの堤防が痛み、そのことが水害をもたらしたことの好例である。ぜひ、今後の河川治水対策の項目として検討してもらいたいものである。

第3節 被災者の体験記-加藤恒勝氏の手記-

加藤恒勝氏は、福井地震の際に倒壊した映画館の下敷きになり、迫り来る炎を間近にしながら、はりに挟まった左腕を自ら切断して、九死に一生を得た方である。本節では加藤氏が1989（昭和64）年に執筆された「福井地震昭和23.6.28-重傷者の受傷後20時間の動向」という手記を題材に、衝撃的かつ生々しい地震直後の様子を紹介する。

<加藤恒勝氏のプロフィール>

生年月日：1922（大正11）年1月

出身地：福井市

学歴：1941（昭和16）年4月、福井師範学校卒業

職歴：1941（昭和16）年、福井市豊（みのり）小学校勤務。

1942（昭和17）年12月、現役兵として入隊、中支戦線の戦闘に参加する。

1946（昭和21）年6月、復員、学校復帰。

地震当時は26歳であり、その後、福井市内の小中学校の教員、教頭、校長を務められた。美術（彫刻）がご専門で、福井市の美術作品展「市美展ふくい」の創設とその後の運営を務めるなど、長年に渡り福井県の美術教育の振興に努力されてきた。享年84。

1 福井地震（1948（昭和23）年6月28日）-重傷者の受傷後20時間の動向-

(1) 被災現場

「東宝文化劇場」（**図5-11**「被災現場概念図」参照）、すでに映画は上映されている。暗い館内を3分の1程進んで、通路から3番目の椅子に着席する。（スクリーンを見つめて1,2分した時であったか）「ドン」という音と衝撃、地震だと直感する。前の椅子に掛けた上着と雑のう（ショルダーバック）とをつかんで、よろめきながら出口へ、明るい出口の前を、建物の破砕片が滝のように落下している。突破をためらった次の瞬間、下敷きになる。（**図5-11**「被災現場概念図」の下図参照）上腕部がはさみつけられている。（入り口のモルタル床・倒れた自転車の車輪・腕・モルタルで外装した梁の順）（注.地震発生サマータイム午後5時14分）

映画館主・従業員等の男子数人が、折れた柱をてことして梁を浮かせ私を救出することを試みる。余震のたびに作業中断。荷重大きく救出不可能。私のやや後方の内側で助けを求めていた婦人は、自力で脱出したのか静かになる。私を救出しようとしていた人たちは、一人去り二人去り徐々に立ち去る。関東大震災の時「腕を切断」して救出された者があったという話を、ふと思い浮かべる。

空を仰ぐと、黒い煙が北北西に向けて走っているのが目に入る。「腕切断」を決意し、ひとり残っていた映写技師にその旨を伝える。彼は了解し、切る物を取りに走り去る。

(注. 下記の記事を参照すれば、この時点の時刻は、サマータイム午後5時30分～5時50分ごろと想定される。)

・・・5時27分、1本の薄い灰色の煙の束が傾きかかっている百貨店の背後にノロノロと這いあがっていく。火事がすでに始まったのだ。・・・

(マイダンス記者が打電した記事の一部。『福井烈震誌』p.1174)

道路の方は(砕けた物が堆積していく。私には見えない)先刻来の騒がしさも静かになる。仰向けのまま右手をつかって放尿する。

映写技師は斧を持参し、連れの男が腰ひもを持ってやって来た。腰ひもで腕の付け根を固く縛ってくれる。余震のたびに締め付けられて、しびれていた腕がいつそうしびれ、切っても痛くなかろうという気になる。映写技師は私に斧を渡し、「自分で切れ」と言って物陰に隠れる。

私は、自分の左腕に斧をたたきつける。3回、血まみれになる。しかし、切り終えそうもない。「オーイ」と叫んで彼らを呼ぶ。

「切れたか」

「まだ・・・」

(すでに血まみれの腕を見て)映写技師が斧をふるう。斧が打ち下ろされるたびに、腕から心臓にかけて大衝撃がある。(おおよそ切れてからは、しゃがみ込んで切る。)10回あまりで切り終える。(彼は、切り始める前に、大判の本ほどの板切れで、私の腕の付け根から首にかけて覆った。斧がそれた時の用心である。)

切り終わると、私はバネ仕掛けのように自然に立ち上がって走り出そうとした。彼らは「待て」と言って引きちぎったカーテンで傷口をくるみ、両側から肩を組むようにして表へ走り出る。

(注. 時刻は、午後5時50分～6時10分頃で、地震発生から35分～55分程の経過である。)

「だるま屋デパート」は、地震2時間後に全焼した。」と、『福井烈震誌』に坪川氏が述べていることからすれば、類焼30分程前の脱出である。)

(注. 斧の入手については後日、映写技師が「進駐軍宿舎から」と述べている。図5-12「動線図」のB進駐軍宿舎、もしくはC軍政部クラブであろう。いずれにしても往復数分の位置にある。)

(2) 路上に放置の運搬車に乗る

既に路上は避難する人影もとだえたようである。この重傷者を肩を組んで走らせる。前方にある市役所の望楼がくるくる回って見え、苦しい。

図5-12「動線図」の②の地点、仕出し屋「くらや」の前の路上に、三輪運搬車が大きな板一枚を乗せたまま放置してある。それに乗らされ順化小学校の校庭(地点③)に避難する。

(3) 順化小学校の校庭

校庭は、避難者と搬出された手回り品とで混雑している。そこへ下ろされる。患部を上にして横たわる。(以後、常にこの姿勢である。) 助けてくれた映写技師らは去る。

ちんぴら風の若い男がチョコレートとりんごとをくれる。のどが渇くので、りんごをかじるが、食べる気にならず「いらぬ」と思ったとたんに、りんごは手から離れて地に落ちる。またしても渇くので、同じ事を再三くりかえす。体力の衰弱の度を意識する。患部に痛みやうずきはない。

半壊の校舎(空襲で焼失後のバラック、平屋)の中で、友人の大橋教諭が校具をせっせと搬出しているようすが、向こうの火災の明るさで影絵のように見える。それを安らかな気持ちで眺めている。

ここに避難していた顔見知りの品川書店の主人が、横たわっている私を見つける。彼は、「県庁前に救護医療所が設置されたい。そこへ・・・」と知人を呼びに集め、戸板に乗せて搬送する。戸板がゆれるたびに患部を覆ったカーテンの上に血の泡が噴く。

私は、それをわりに冷静な気持ちで見ている。むしろ、「生き抜いてみせるぞ」という気が少しずつ沸き出てくる。

(4) 応急救護所

県庁前広場の応急救護所(地点④)へ着く。私を運んだ人たちが身振り手振りで進駐軍の軍医に頼みこんだ。患部に赤チンキの塗布と注射を二本の処置。(救護所には、日赤福井病院の救護班も加わっていたようであったが、机一個を中心に7、8名程度の人数で対応していた。小さなテント一張りがあったかもしれない。時刻は6時30分前後か。二本の注射は、強心剤・破傷風血清注射であろうと思いこんでいる。後日、鯖江国立病院で同室の元気だった負傷者が、破傷風で2名も死去したが、その菌におかされそうな私が難を逃れた。)

広場に横たわっていると、私の自宅に近い魚屋の主人を見かけた。声を掛けて自宅への連絡を頼む。(魚屋の主人も負傷していたので、ひとりで歩いて来たのである。彼の家族の負傷の処置のことであったかも?) (私をここまで運んだ人たちは、救護所の処置が終わると、すぐに引き上げたように思う。知人にしろ、救護班員にしろ、付き添ってくれる余裕はない。)

間もなく妹(T)が来る。妹のついでで乗用車が工面され、日赤福井病院へ向かうことにする。
(注. 救護所の中核であったこの救護所で治療を受けたので、私の受傷は「現場で腕を切って脱出した青年がいる」

と、報道関係者に伝わったようである。翌朝、東京の新聞記者が病院へ取材に来たが、他にも留守先に住所を訪ねてきたりしている。カール・マイダンスも進駐軍軍医により取材したとも考えられる。ただし、彼の自筆の文章には、私の被災現場(類似事例かも?)に遭遇したような表現がある。)

(5) 日赤福井病院へ向かう

⑤の地点、左側の民家が火災を吹き上げている。運転者は「あっ」と声をあげて慌てて市役

所前までバックする。(市内中心部は火の海であろう。そういう情報を知らないままの行き当たりばったりの行動だったのである。)

日本医療団福井県中央病院(現、県立病院)へ向かうことにする。悪路で車がゆれる。血の泡が噴く。

(注. 中央病院までの行程について、県庁前～志比口踏切の間、通過道路の特定できない。)

(6) 道路閉塞 担送となる

志比口踏切を越えた図5-12「動線図」の⑥の地点付近、両側の民家が道の方へ倒壊していて、自動車の通行不能。近くの人の協力で、戸板で以て中央病院まで担送される。

(注. 『福井震災誌』『福井烈震誌』によると、福井軍政部は、いち早く道路の啓開にあたったとあるが、南や北からの救援ルートは確保されたが、当方面は手が回らなかったなのであろう。翌朝もこの間は同じように担送であった。)

(7) 福井県中央病院

病院の草原に横になって治療を待つ。負傷者と家族らで混雑している。日が暮れる。

私の治療がようやく草原の上で始まる。看護婦1人と妹は私をおさえつけている役、他にローソクの明かりを持ったり、助手を務める看護婦。

治療は、はさみでピシピシ(血管を)つまんで糸でくくっている。壊れた病院の一室が向こうに明るく見える。看護婦が数人、そこへ医療品を取りに入っているらしい。余震のたびにキヤーといって跳び出る。ローソクを持つ看護婦の手がゆれて肩に落ちるろうが熱い。医者が時おり看護婦をどなりつける。

腕断端の止血が終わり、裂傷を受けている後頭部を消毒し縫合する。針を通すたびにしくしく痛い。(腕の施術に麻酔薬は使用されなかったと記憶している。横になって安静にしているかぎりでは苦痛はなく、意識明瞭である。)

(注. この時の腕の施術は、「血管の結紮」で、断端は複雑な傷口のままである。小坂政一氏は、1945(昭和20)年4月から同病院長、外科担当)

(注. 血管の結紮が終了した時刻は、既に日は暮れていたもので、8時半から9時前後と考えられる。当時はサマータイム実施中、この文の記載もサマータイムを用いている。)

まっくらになってからも、重傷者がリアカーや戸板などで運ばれてくる。「森田町からだか、九頭竜川の橋が落ちているので難儀した」など話している。

「輸血などということになるかもしれん。そばを離れるな」と、妹に指示する。夜中のひと時、雨がぽつぽつ落ちる。困ったなと思ったが降り止む。蚊になやまされる。(他の患者の付き添いが張った蚊帳(かや)に入れてもらったか、記憶あいまい。)

うとうと眠ると、うなされて目が覚めること数回。

朝になる。飛行機が松林の向こうを低空で旋回している。「生きながらえたな」と思う。気分

爽快である。東京の新聞記者だという青年が取材にくる。

(8) 日赤病院へ向かう途中の路上

本格的な治療のために、日赤福井病院へ行くことにする。

(注. 行政的な指導・指示のない状況、現時点では各自の判断である。)

妹が徒歩連絡で昨日の自動車を回してくれる。図5-12「動線図」の⑥の地点まで担送、以後自動車。気が付くと、受傷以来、枕もとや足もとに置いた、麻の上衣がない。(先刻、担送を手伝ったひげづらの男が持ち去ったな、と思う。)他人から借りた地図を入れた雑のうはあるので、まあまあと思う。

(注. 志比口踏切～大名町ロータリーの間、通路特定できない。)

自動車の座席から伸び上がって、市街の惨状を見ながら行く。私は、戦勝者のように興奮している。

図5-13「動線図」の⑧の地点で自動車が停止する。伸び上がって外を見る。南の方から入ってくる救援車両で渋滞しているらしい。探検家のような服装をしたアメリカ人のカメラマンと通訳たち3,4人が私の所へ来て話しかける。シャッターをきる。近隣の人たちもどやどやと来る。

(注. このカメラマンが、ライフの記者カール・マイダンスであろう。昨日もどこかで出あっていたようなことであったが、今日、その場所など記憶は確かではない。近隣の人々の中に、友人の岩佐勝利氏の顔があった。後日、妹はこの時、岩佐氏の母親らしい人から「ゆでじゃがいも」をもらって、おいしかった、というのが、私にはゆでじゃがいもの記憶はない。当時、私が何を食べたか食べなかったか、とにもかくにも食欲はなかったように思われる。(この付近は、私の職場である豊(みのり)小学校の校下であり、私はひととき興奮していた。カール・マイダンスの随想にあるような冗談のひとつも気負ったあまり口にしたかもしれない。)

(この随想とは、『動乱』p.314～321のp.321の個所。)

(9) 赤十字福井病院前—鯖江へ

やがて日赤病院到着、先のカメラマンの一行に再びあう。次々と運ばれてくる重傷者の惨状をカメラに収めている。

門を入ったあたりに応急救護所のような人の集まりがある。近づくと、「重傷者は鯖江国立病院行き」と言われる。次々そう言っている。(昨日来「日赤病院なら」と思っていたが、ここもほとんど壊滅の状態だとは知らなかった。)

鯖江輸送の順番をしばらく待たされたが、やがて輸送のトラックに乗る。私たちが乗ったトラックは「だるま屋百貨店」のものである。無蓋の荷台に負傷者が5,6人横になったり、うずくまったりし、付き添いらしい者も何人かを乗せて出発する。私に昨夕から付き添った妹に替わって、母が乗る。

ゆれの大きいトラックでは、ずっと横になっていた。トラックは出発すると間もなく花堂地

区で渋滞した。国道といっても狭く、北進する大量の救護車両に阻まれ、南進も、のろのろづくめである。空しか見えず、太陽が照りつける荷台で、だんだん苦しくなってくる。やがて頭上に松の木の枝が次々と走るのが見えた時、国立病院へ着いたなど、ほっとする。

(注. 日赤福井病院の出発は午前8時～9時ごろと考えられる。鯖江国立病院着の時刻は不明であるが、この行程に2時間前後、あるいは3時間を要したとも思われる。)

(10) 鯖江国立病院での治療その他

ベッドが10台ほどの病室へ収容された。

脊椎損傷者は寝たきりであったが、外見上は私が最も重傷のようであった。

看護婦が血液型を調べたり、日に何度か検温などを記録していった。

4, 5名からなる医師団(インターン等を含んでいたと思われる。)が入れ替わり検診に来た。傷口を見て会話を交わし、ランク付けをしているようであった。「わりに元気だなあ」と言うのが聞こえたりした。

手術など本格的治療はまだのように思えた。

食事は「おもゆ」であったが、食欲はなかった。

その日の午後か、翌日であったか、見知らぬ面会人があった。映画を見に行った弟が帰宅しないが、「腕を切断して助かった青年」は、弟ではないかと検分に来たのである。彼等はがっかりして帰っていった。

入院の翌日(地震から3日目)、夕刻近くになって手術となった。全身麻酔であるが、縫合のころに麻酔がさめ、腕をもぎとられるような痛さであった。局部麻酔を打ったようだが「痛い」「痛い」と言うと「自分で腕を切った人が、これくらい我慢しなさい」と婦長の声がとんだ。(この執刀は日赤京都病院からの救援医師によった。)

入院以来、傷はだんだん痛んだし、夜もろくに眠れなかったが、手術が終わるともっと痛んだ。近くを人が通るだけの振動が床板から伝わって、うずいた。夜はうなされ通しであった。

手術後1日たった頃から痛みはやわらぎ食欲も出てきた。

(破傷風での死者があったころから)首の付け根の血管にする注射が加わったが、気味の悪いものであった。

食事をする時は、だれもがするようにベッドの上にあぐらをかいて食べたが、ころりと転倒するような不安を感じた。(身体のアンバランス感は食事以外では気付かずにいた。)左半身が軽すぎる感じである。右膝を立てることでバランスがとれた。

映写技師の山崎さんが見舞いに来た。「切るには切ったが助かるかどうかは不安で・・・」というようなことを言った。快方に向かっていると聞いて見舞いに来たのであろう。

「自分で切れと言って、外で待っている時、よもや自分では切れまい、もう見捨てて行こうと思った。その時、あなたがオーイと呼んだ」という話を彼はした。そういう瀬戸ぎわがあったのを初めて知った。

見舞いの客のない時は退屈で、4, 5日したころから病院の中を歩きまわった。病院の近隣も散歩した。歩行にはなんら不都合はなかった。許可を得て四ヶ浦海岸へ行って少し泳いでみた。思ったとおり「どうにか、泳げた」。7月25日（負傷から28日目）に退院した。

(11) 余録（「幻肢」（ファントム・リム）について）

知人が「寒くなると傷口がうずくそうです」と言ったが、それらしい気配もなかった。

ところが、10月末のある日、断端に妙な痛みを感じた。寒くなったのでうずきの前兆かと思ったが、そうではなかった。

かゆいのである。しかも、「存在しない腕のあたりがかゆい」。気味のよくない気持ちだが、かつて呼んだ長井隆博士の随想の中の一場面・・・大腿部からもぎ取られた負傷兵が、無意識にしきりと（無い太股の）甲板を引っかいている・・・を思いだし、ああ、あれだなと思った。

かゆいことのほかに、「無い腕の手のひらを、トロトロと暖かい液体が流れる」こともある・・・映画館で下敷きになった時、手のひらは梁の向こうへ出ていた。何度か動かしてみたが、すると、暖かいもの（血）がトロトロと手のひらを指に向かって流れた・・・それが今、寸分たがわず再現されている。

ありがたくもない置き土産というか、奇妙な形見というか、これらの現象は10月以降、1日に何回かあった。かゆいのも、トロトロするのも肩をもんでやれば、すぐに消えはしたが、もぎ取られた腕の亡霊のようでいとしいとも思えた。

数カ月を経ると漸減して行って、今日では年に1, 2度あるなしになった。

（注. 当時、知人の心理学者が、それは「ざんぼう意識」だと教えてくれたが、残忘・残亡・惨亡・・・かは聞き損じた。専門の辞典を探しても見あたらない。気になる語感である。

phantom-limb も、（まぼろしの腕・幽霊の腕）幻影肢・幻想肢・幻肢など、なるほどと思われる。私の幻肢は幸いにも「幻肢痛」をとまなわなかった。）

(12) この手記の記述について

- ① 受傷後「20 時間」とは、当受傷者が災害地の異常な状況下に置かれていた時間である。この時間内の動向が生死を分けたと考えられる。
- ② 上記文章の(1)～(9)までが、その20時間であって、客観的な記述につとめた。
- ③ 時刻や経過時間は、火災の発生・類焼状況・日没などを、体験した状況と文献等を交差させるなかで求めたものである。
ただし、参照した『福井震災誌』その他にも、時刻についての記載は乏しく、指針となるものはわずかであった。したがって、当手記などの累積が、時・所・状況を立体的に明確にするともいえる。
- ④ 被災者(私)の心理描写や心身損耗の状態も、修飾的な表現をつとめて避けながら記述した。

(13) 補遺（心身の状態の推移）

- ① 被災現場・・・関東大震災時の事例を想起し、その事例にかける。
- ② 避難した校庭・・・意識は明瞭であるが、肉体的には極限の状態。ただし、周囲の人々から、「瀕死の重傷者」と見られる中で、闘志のようなものが出る。
- ③ 中央病院・・・止血の処置完了で、死からの歯止めができたと感じ、自信がわく。
- ④ 翌朝・・・生きて朝を迎え、「この災害における勝者、ヒーロー」の気持ちになる。
- ⑤ トラック輸送以降・・・心身の疲労が出る。傷の疼痛はないが全身が苦しい。

(14) 参考にした文献

（「」は、その中の該当見出し名である。）

『福井震災誌』・・・福井県・編集, 昭和 24 年 6 月

『朝日新聞』福井板「人間も復興」・・・昭和 24 年 6 月

『世界の写真家』「カール・マイダンス」ダヴィド社刊・・・1965 年（昭和 40 年）3 月

『動乱』「鯰」・・・カール・マイダンス著, 論争社刊

『アースクウェイク』・・・p. 162～171（文と写真）, タイムライフ社刊

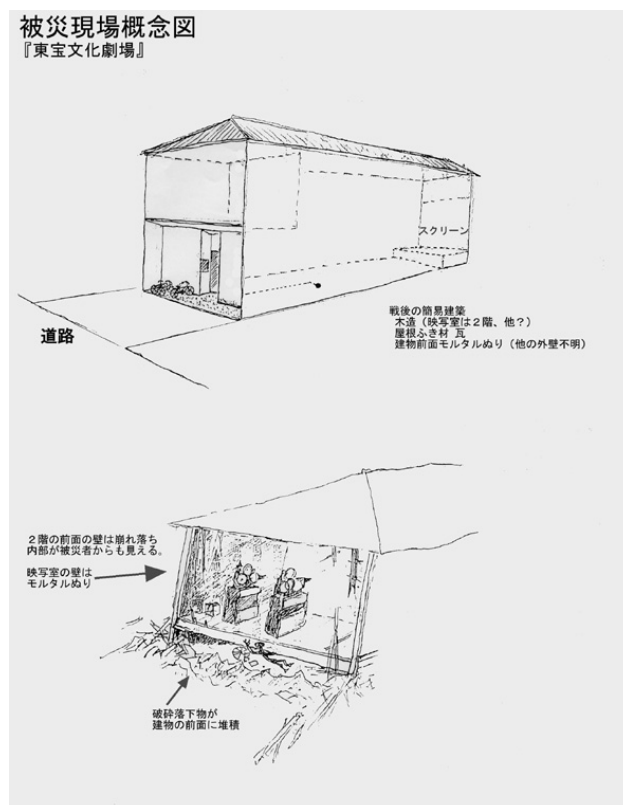
『福井烈震誌』・・・福井市編集・刊, 昭和 53 年 3 月

とくに第 3 編 第 4 章・第 7 章第 2 節

第 6 編 第 1 章第 2 節・第 8 節

『福井県空襲前後の医療史』・・・p. 160～161 ならびに付図, 県医師会編集, 昭和 53 年

『この道』・・・とくに p. 536～542, 福井赤十字病院看護婦互助会編集・刊, 昭和 60 年



加藤恒勝 記 1989.9

図 5-11 被災現場概念図

（加藤氏直筆の図を画像データ化した。）

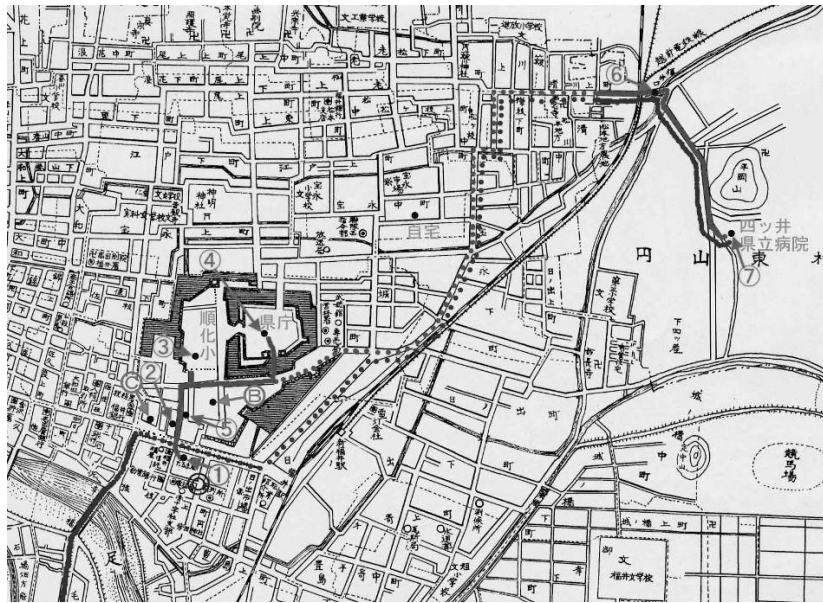


図5-12 動線図(詳細図) 原図:昭和12年版福井市街地図(新修福井市史付図)
(原図に加藤氏が加筆修正した地図を基に画像データ化した。)

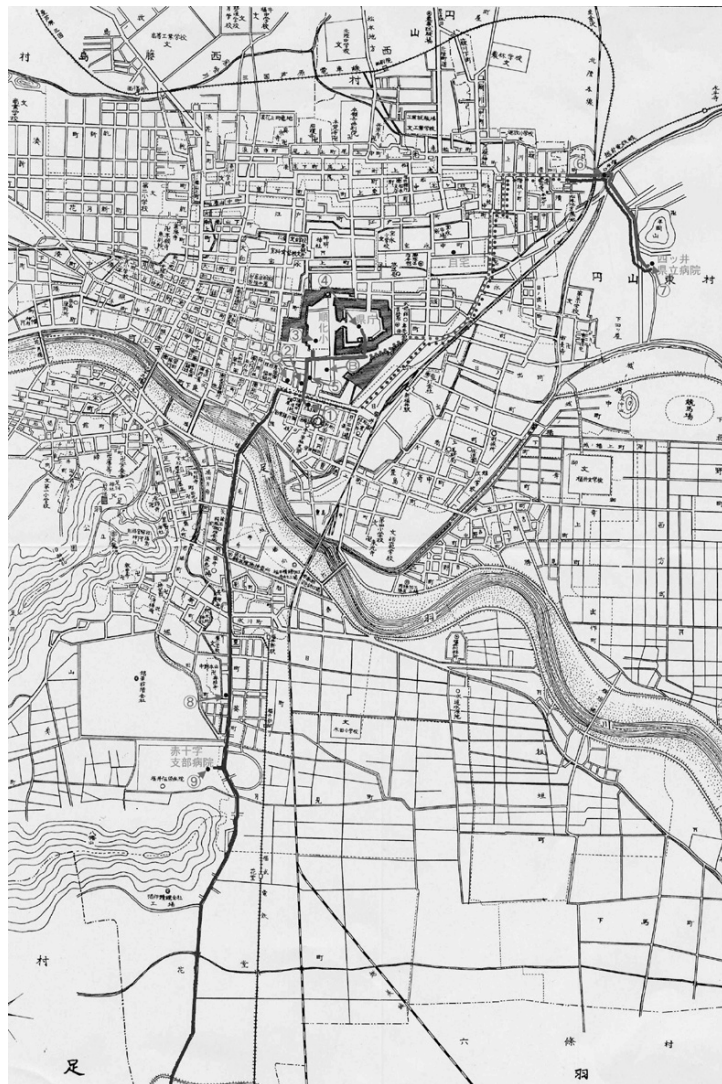


図5-13 動線図(全体図) 原図:昭和12年版福井市街地図(新修福井市史付図)
(原図に加藤氏が加筆修正した地図を基に画像データ化した。)